音楽科学習指導案

日　時　　令和元年５月３１日（金）
学　級　　岩手大学教育学部附属中学校
　　１年Ａ組３５名
会　場　　音楽室
授業者　　柿崎　倫史

１　題材名

ヴィヴァルディ先生に学ぶ
～作曲者の立場に寄り添い、旋律・強弱・構成の特徴を聴き取ろう～

２　題材について

（１）学習者観

１年Ａ組の生徒は音楽表現にあたって、基礎的・基本的な技能や表現に向かう意欲は大変高い。学級内でも表現することに対して躊躇することはあまり見受けられない。本題材は入学後初めての鑑賞領域の題材である。意欲的に学習に向かうと予想されるが、鑑賞のオリエンテーションも兼ね、ていねいな指導が必要とされる。

アンケート調査の結果、音楽の学習には概ね前向きであるといえる（図１）。しかし、「音楽の授業が好き」の項に対して、「音楽を聴くのが好き」が高い傾向にある（図２）。これは、生徒が、自身の音楽の好みと音楽の授業での学習活動は別物と捉えていることを示している。授業内で、生徒の好みから価値判断する場面を増やしていき、音楽科の学習によって自らの感性を豊かにしていくことに積極性をもたせたい。

本題材に関わって、生徒に視点を与えるために、音楽作品の成立過程での２つ（作詞者・作曲者）、表現の場での２つ（演奏者・聴衆）の計４つの立場について重要と思われるものについてアンケートを行った（表１）。大きな偏りは見られないが、聴く立場より作る立場のほうを重要だと捉える生徒が散見される。作曲者は聴衆の反応を想定して音楽を作ることに意識を向けさせ、新たな視点をもたせたい。

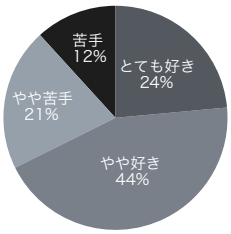

図１　音楽の授業は好きですか

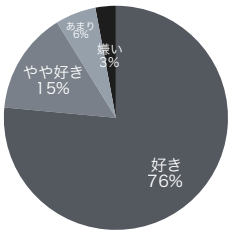

図２　音楽を聴くのは好きですか

		とても大切	大切	あまり大切ではない	大切ではない
成立過程	作詞者	43%	34%	14%	6%
	作曲者	49%	31%	11%	6%
表現過程	演奏者	60%	23%	3%	11%
	聴衆	40%	29%	29%	14%

表１　どの立場が大切だと思いますか

（２）学習材観

①音楽作品について

アントーニオ・ヴィヴァルディ（1678～1741）は、ヴェネツィア生まれの作曲家であり、ヴァイオリン奏者である。多作家で、イタリア・バロック期において華々しい功績を残している。彼は1703年からピエタ慈善院（*Ospedale della Pietà*／ピエタ養育院、ピエタ音楽院）に務めたことから、そこで養育されている「合唱・合奏の娘たち」のために晩年まで合奏曲や協奏曲、教会音楽などを作曲した。ピエタ慈善院では定期的にヴェネツィアで演奏会を開き、その収益が養育院の運営に充てられていた。

ヴァイオリン協奏曲集「和声と創意の試み（*Il cimento dell'armonia e dell'inventione*）」の冒頭４曲はヴィヴァルディ自身が献辞で「四季」と表し、今日まで親しまれている。「四季」は１曲目「春」の第一楽章が大変有名で、音楽の教科書にも掲載されている。リトルネッロ形式で、トゥッティ部分は明快で親しみやすく、ソロ部分には意匠が凝らされている。和声は平易なものが曲を通じて用いられている。作曲にあたっては、（どちらが先かはわからないが）ソネットが附されており、標題音楽的側面も持ち合わせている。

②学習材化にあたって

ヴィヴァルディの四季より「春」は永らく教科書に掲載されているが、改めて学習材として「何が学習できるのか」を焦点化させたい。

・弦楽合奏の演奏形態と楽器についての知識　　・弦楽合奏の響きと同族楽器の合奏音楽の特色
・バロック期の演奏様式と通奏低音　　・リトルネッロ形式の特徴
・ソネットとの関わりによる音楽と言葉の相関性　　など

以上のことを踏まえ、学習指導要領の以下の内容を指導する。

鑑賞（１）
ア　鑑賞に関わる知識を得たり生かしたりしながら、
（ア）曲や演奏に対する評価とその根拠　について自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと。
イ　次の（ア）から（ウ）までについて理解すること。
（ア）曲想と音楽の構造との関わり
（イ）音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術との関わり
〔共通事項〕
音楽を形づくっている要素（音色、リズム、旋律、構成）や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したこととの関わりについて考えること。

（３）教科研究との関わり

中学校入学後初めての鑑賞領域の題材となるため、題材の始めにオリエンテーション的な活動を盛り込む。聴く活動は個人の感性が色濃く出る。そこで生徒が知覚したことと感受したことを結びつけながら、記述等で整理しながら残し、振り返る活動や、他人と交流する活動で深めていく。この手順を丁寧に生徒と確認していきたい。

本題材においては、「人間の強み」を発揮する生徒の育成を念頭に置き、ヴィヴァルディの「四季」の再学習材化を図った。成立背景や作曲者の生き様を紹介し、ヴィヴァルディがピエタ慈善院で過ごす子どもたちの音楽的な成長と施設の発展を願いながら、作曲者としての実績を積み上げてきたことをおさえつつ、明るく明瞭な曲作りの中にも、聴衆の心をどう揺さぶろうとしているのかに思いを馳せさせることで、音楽の成立背景に留まらず作者の思いと自分を重ねて音楽を聴くことができると考えた。

①　多角的・多面的に音楽を捉える指導・支援（音楽科固有の見方・考え方を働かせる問題解決的な学びのプロセス）

本題材では、まず音楽を形づくっている要素を限定して聴く活動から入るのではなく、あえて「音楽の構造」と「音楽の背景となる文化や歴史など」を最初に示し、知覚・感受の手がかりになるようにした。その学習プロセスを経た上で、具体的に「音色、リズム、旋律、構成」を聴く視点を与え、知覚・感受を深めることを計画している。ヴィヴァルディの人となりや、その背後の文化、彼の作曲様式などに触れ、聴取を深めていくうちに、知覚・感受がより鋭敏に、そして深くなることをねらった。

例えば、ヴァイオリンが高音域で早いパッセージを弾いている場面では、生徒はヴァイオリンの音色と、旋律の変化について知覚し、そのよさについて感受しようとする。その際に生徒からは背景等を根拠にして、「ヴィヴァルディが独奏ヴァイオリンに、高い音でよってきらびやかな旋律を弾かせることで、ソネットの世界が現実になったようで、とてもびっくりした」「とてもリズムが細かく、難しそうだ。ヴィヴァルディの弟子にヴァイオリンの名手がいて、この曲にチャレンジさせたと思う」「独奏と合奏の差がすごくて、聴いていて飽きなかった。当時の人たちも惹きつけられたのではないか」などの意見が出ると予想している。また、生徒同士で意見をまとめ交流する中で、自分では発見できなかった音楽の特徴にも気づくことができる。

②「よい表現者」としての学び（学びの自覚化）

本題材の中段で作曲者の立場で考える活動を設定している。鑑賞領域の題材であるが、表現者としての憧れを抱かせることが、自らの感性をメタ認知することにつながると考えた。

③「よい聴衆」としての学び（真正な学びの場の設定）

①と②の活動に支えられて、音楽を愛好し、音楽文化全体へ共感することができるようになると考える。本題材では、終末部にレポート課題を設定しているが、単に知覚・感受したことを言葉でまとめることだけでなく、自分にとっての価値と、社会にとっての価値を見出すように指導する。価値の押し付けは避けたいが、個人の好き嫌いを超えて、一人の音楽家がこの世に残した音楽について、現存しているだけでも価値を見出すことができるような、柔らかくしなやかな視点をもたせたい。

以上、３つの視点を包含しながら題材をデザインした。この題材の中心となる学習活動は、本校で育成を目指す資質・能力のうち、「主体性等–身の回りの事象の価値や問題に気が付く感性と力」の育成に資するものである。

３　題材計画

（１）育成を目指す資質・能力

本題材で育成を目指す資質・能力について、以下に述べる。

①知識及び技能

・自らの感性を働かせ、「好み」を自覚しながら、「春」の音色・旋律・強弱・構成の特徴を理解し、その特質を感受する力。

②思考力・判断力・表現力等

・「春」の音楽の特徴を捉え、音色・旋律・強弱・構成の特徴を知覚し、その特質を感受しながら、「春」について個人内や社会的・文化的・歴史的価値を見出す力。

③学びに向かう力、人間性等

・ヴィヴァルディの人となりや、「春」の成立過程でのエピソードに共感し、尊重していく態度。

（２）指導目標

ヴィヴァルディの人となりや共感させながら「弦楽合奏」「リトルネッロ形式」「バロック期の音楽」それぞれの特徴を捉え、「春」を情感豊かに聴き取らせる。

（３）評価規準

鑑賞の能力		音楽への関心・意欲・態度
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①弦楽合奏の特徴、楽器についての基本的な知識と共に音色の特徴について適切に理解している。 ③「春」の成立背景や作曲者の人となりについて理解している。	①弦楽合奏の深い音色や、曲想の変化を知覚・感受し、よさや美しさを感じ取りながら聴いている。 ②ヴィヴァルディの作曲様式について、その音楽的アイディアを自分なりに言葉にまとめ、知覚・感受を深めながら聴いている。 ③「春」について、作者の思いやソネットとの関わりを踏まえながら聴き、作品の価値付けをし、適切に言葉にまとめている。	①「春」やその他の作品を音楽の特徴を捉えるために聴く学習活動に主体的に取り組もうとしている。 ②ヴィヴァルディの作曲様式について、その音楽的アイディアを言葉にまとめ、聴く学習活動に主体的・協働的に取り組もうとしている。

（４）指導計画及び評価計画

時	主な学習活動	指導の留意点等	評価規準等
1	・弦楽合奏の楽器について学ぶ ・「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」を聴き、音楽の特徴をまとめる ・「ピチカート・ポルカ」を聴き、特徴をまとめる ・ヴィヴァルディについて、生い立ちと時代背景を確認する ・「春」（ラ・プリマヴェーラとして紹介）を聴き、特徴をまとめる ・ヴィヴァルディの人物像について	・弦楽器についての基礎知識を理解させ、レディネスを整える。	上記①
2（本時）	・和名「春」を知り、一度通して聴き、知覚・感受したことを言葉でまとめる。 ・ヴィヴァルディの初期の作品から彼の作曲様式を確認する。 ・作曲者の視点で「プロの技」をまとめる。 ・それぞれまとめたものを意見交流する。 ・交流したことで感じたこと、考えたことをまとめ、発表する。	・一つの視点に寄せず、生徒が自由に発言できるような雰囲気づくりに努める。	上記②
3	・「春」を前時を踏まえてもう一度聴き、まとめのワークシートに記入する。 ・なぜ「春」は今でも世界中で愛されているのか、のテーマでレポートを書き、まとめる。	・ソネットが描く情景を単純に音で再現しているのではない、と捉えさせる。	上記③

４　本時について

（１）主題

ヴィヴァルディ先生のアイディアに学ぶ

（２）指導目標

ヴィヴァルディの作曲家としての姿に共感させながら、どのように音楽を構成し、生み出していったのかを考えさせ、主体的に鑑賞させる

（３）評価規準

思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
②ヴィヴァルディの作曲様式について、その音楽的アイディアを自分なりに言葉にまとめ、知覚・感受を深めながら聴いている。 （ワークシート）	②ヴィヴァルディの作曲様式について、その音楽的アイディアを言葉にまとめ、聴く学習活動に主体的・協働的に取り組もうとしている。 （ワークシート、観察）

（４）授業の構想

前時までに「弦楽合奏の音楽的特徴」と「ヴィヴァルディの人となり」については学んでいる。本時では、ヴィヴァルディが自己の作品を残そうとしただけでなく、ソネットをきっかけに、より演奏効果の高い音楽のつくり方を工夫したことを考えさせる。

まず、前時で伏せていた和名を伝え、「春」というイメージを元に知覚・感受させる。単純に「プリマヴェーラ」とだけ伝えていた音楽に、知覚・感受の手がかりになるようなイメージを与えることがねらいである。

その後に課題提示をし、「ソネット」について触れる。「ソネット」は、ヴィヴァルディが作曲する上で言葉と音楽を往還させたものであり、生徒たちの想像力を掻き立てる役割を果たす。さらに、課題に迫るための視点を持たせるために、「調和の霊感（*L'estro Armonico*）RV.310」を聴きながら、教師の解釈例としてデモンストレーションを行う。「調和の霊感」はヴィヴァルディが若い頃にピエタ慈善院のために作曲した作品で、彼の作曲様式の特徴を端的に感じ取ることができるので取り上げた。

課題に迫る聴取の前に、この活動を経ることで

「弦楽合奏」×「作曲者の人となり」×「ソネット」

と、生徒の中で音楽とその成立背景が有機的につながると考えた。

生徒は「春」を鑑賞しながら、音楽的な見方・考え方を働かせて聴き、そこで感じ取ったことを言葉にしていくのはもちろん、ヴィヴァルディがこの曲に込めた思い、作曲上の種々の工夫について、リアリティをもって感じ取るであろう。生徒目線で「さすが！」と感じる箇所を「プロの技」として捉え、交流して、深い聴取につなげたい。

さまざまな視点、気付きを学級内で共有し、音楽を多角的・多面的に捉えることで、「有名な曲」という外部からの価値だけでなく、自己内の感性に裏付けられた価値付けができると考え、本時を構想した。

（５）本時の展開

段階	学習内容	生徒の活動	指導の留意点　評価等
導入 10 分	１．前時の復習 （５分） ２．学習材との出会い（5分）	・弦楽合奏の特徴、楽器の種類等の確認 ・ピエタ慈善院の様子、ヴィヴァルディの人となりを確認する ・和名「春」を知り、一度通して聴き、知覚・感受したことを言葉でまとめる。	・テンポよく進めたい。 ・あまり声をかけずに活動に入らせる。
展開 30 分	「春」から感じる、ヴィヴァルディ先生の「プロの技」とは ３．ソネットについて知る（５分） ４．「調和の霊感 *L'estro Armonico*」の鑑賞（５分） ５．「春」を鑑賞し、ヴィヴァルディの作曲技巧をまとめる（10分） ６．意見交流（10分）	・ワークシートに記入する。 ・ヴィヴァルディの初期の作品から①覚えやすい曲調、②技巧的な旋律、③独奏と合奏の関係（リトルネッロ形式）を確認する。 ・作曲者の視点で「プロの技」をまとめる。 ・それぞれまとめたものを意見交流する。 ・交流したことで感じたこと、考えたことをまとめ、発表する。 【予想される生徒の反応】 ・ソネットを音楽で見事に表現している ・独奏ヴァイオリンを生かした曲になっている ・次々と新しい展開が来て、聴く人を飽きさせない	・ソネットの原語と日本語訳を示し、掲示しておく。 ・①～③の視点を教師が主導して確認する。 ・自ずと音楽の特徴に迫っていくと予想される。学習内容２の聴き取りよりもふかまるように、ヴィヴァルディの人となりやソネットの内容などを手がかりにするように、机間巡視して指導・支援していく。 ○ワークシートへの記入 ・グループワークを３分、挙手発言での意見交流を７分取る。 ・音楽を形づくっている要素や、ソネット、ヴィヴァルディの人となりなどの視点をバランスよく挙げるよう、コーディネートする。
終結 10 分	７．まとめ	・もう一度「春」を聴く。 ・ワークシートの「聴き方が変わった点」に記入する。	・集中して臨ませたい。 ○ワークシートへの記入

【引用・参考文献】

・大島真寿美　2014『ピエタ』ポプラ社.
・川口明子・猶原和子　2012『小学校でチャレンジする！伝統音楽の授業プランーおと・からだ・ことばのリンクをめざして』明治図書.

・斉藤寛 『心を動かす音の心理学』ヤマハミュージックメディア.

・Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース 2018 「Society 5.0 に向けた人材育成 ~ 社会が変わる、学びが変わる ~」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/06/06/1405844_002.pdf（2019年5月27日閲覧）.

・ブラウン，パム（著）　橘高弓枝（訳）1998 『伝記　世界の作曲家１　ビバルディ』偕成社.

・文部科学省 2018『中学校学習指導要領（平成２９年告示）解説　音楽編』教育芸術社.

・吉富功修（編）　2001『音楽科　重要用語300の基礎知識』明治図書.

※題材内のイラスト作成にあたって盛岡市の寺田早杜さんにご協力いただいた。
この場を借りて、感謝する。